解　説

日本信頼性学会誌原稿作成用 LaTeX マクロとテンプレート

A LaTeXMacro and Template for the Contribution to Journal of REAJ

石岡 恒憲

Tsunenori ISHIOKA

概 要

産業安全研究所の斎藤剛氏が作成した Microsoft Word 用日本信頼性学会誌原稿作成用テンプレートに従い LaTeX マクロとテンプレート・ファイルを作成した．テンプレートの記入例にしたがって文書を作成したのち LaTeX で処理すれば，自動的に日本信頼性学会誌のスタイルに整形される．解説・展望・解説・巻頭言・信頼性教室・サロン・開催行事報告等を寄稿する際に利用されたい．なお利用に際して reajReviewMac.sty なるスタイルファイルが必要である．

1　使い方

1.1　環境設定

スタイル・ファイルの格納場所

本スタイル・ファイル reajReviewMac.sty を環境変数 TEXINPUTS で指定されているパスの中から適当と思われるディレクトリに置く．もしこの環境変数が指定されていない場合は，LaTeX をインストールする際に指定したパスの中から適当と思われるディレクトリに置くとよい．もっとも安直には，LaTeX で処理するカレント・ディレクトリに置いても実行可能であるが，データ共用という立場から推奨しない．

漢字コード

本スタイル・ファイルの漢字コードは sjis である．もし，使われている LaTeX の処理系，および動作環境が別の漢字コードを想定しているならば，適当なコード変換が必要となる．たとえば euc に変換するなら，このファイルを afile という名でセーブし，

```
% nkf -a afile > jjasmac.sty
```

とする．

もっとも，電子メールを介することによって，本スタイル・ファイルの入手時に既に (sjis ではない) 別の漢字コードになっているかもしれない．この場合も適用なコード変換が必要となる．

なお，機種によっては\の代わりに ¥(半角) を使う．これは表示が異なってみえるだけで，どちらもオクタル (8 進表示) で 134 の文字コードを示している．

1.2　本スタイル・ファイル固有のコマンド

本スタイル・ファイルの利用に際しては以下の点に留意すること:

- \documentstyle にて reajReviewMac.sty をインクルードする．さらに 10 ポイントの指定，および 2 段組みの指定が必要である．

  例: `\documentstyle[twocolumn, 10pt,reajReviewMac]{jarticle}`

  latex2e ユーザなら，以下のようにする．

  例: `\documentstyle[twocolumn, 10pt]{jarticle}`
  `\usepackage{reajReviewMac}`

- 寄稿区分\class をプリ・アンブル (\begin{document}の前) にて指定する．

  例: `\class{展望}`

- 日本語題名\jtitle と日本語著者名\jauthor をそれぞれプリ・アンブルにて指定する．

- 英語題名\title と英語著者名\author についても，日本語の場合と同様にプリ・アンブルにて指定する．
- 概要は，\abstract{}の波括弧の中に書く．
- 謝辞には特にマクロを定義していない．\section*{謝辞}にて節番号のない見出しを付け，必要に応じて書く．

1.3 ちょっとしたコツ

LaTeX では，特にパラブラフの最初の行において，オーバーフルを起こして右揃えできない場合がある．日本信頼性学会では 2 段組であるためにこの現象が起こりやすい．このような場合，右揃えできないパラグラフ全体を\begin{sloppypar} と\end{sloppypar} で囲むと，解決できることが多い．

1.4 スタイル・ファイルの入手

本スタイル・ファイル reajReviewMac.sty は，日本信頼性学会のホームページ http://reaj.i-juse.co.jp/ から入手できる．

2 執筆要綱

2.1 分量と構成

展望・解説は，2 段組にて原則偶数ページ (8 ページが望ましい) とする．目次建ては，概ね， 1) 題名，2) 著者名，3) 概要，4) 本文，5) 参考文献，6) 著者名の読みと所属 (ひらがな / 所属)，7) 著者紹介文と顔写真 の 7 項目である．信頼性基礎講座・サロン・行事報告についても，上記の目次建てに従い (ただし，概要は省略可)，2 段組にて，できるだけ偶数ページとする．巻頭言は，題名，著者名，本文 (目次構成無し)，顔写真の構成で，2 段組 2 ページ以内とする．解説・展望の場合，「概要」は 480 字を目安とする．

2.2 図表

図表は，和文にて記述する．出現順に通し番号を付し，文中で引用する際は「図 1」「表 1」と表記する．片段幅に収まるサイズを基本とするが，2 段抜きをしてもよい．たとえば表の 2 段抜きをする場合，表の中身を\begin{table*} と\end{table*}とで囲めばよい．図のタイトル\caption は図の下部に，また，表のタイトル\caption は「表 1　○ ○ ○ 」の形式で表の上部に，それぞれ付与する．

2.3 参考文献

参考文献は出現順にて表記する．論文の場合，
著者名：文献題名，掲載誌名，巻，号，pp. aa–bb (掲載時期 西暦. 月) とし，単行本の場合，
著者名：書名，出版社名，pp. xx-yy (出版時期 西暦. 月) と表記することを基本とする．

2.4 用紙サイズ

用紙サイズは A4 とする．ただし LaTeX ではレターサイズが標準であるために，各ユーザが用いている LaTeX 処理系における表示や印刷でレターサイズに最適化されている可能性が少なくない．印刷に当たっては紙面サイズに合わせて拡大/縮小せずに原寸大で出力することに留意いただきたい．

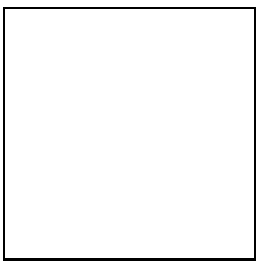
基本的には用意している LaTeX ソースにしたがって入力すれば、執筆要綱にしたがった体裁の原稿ができあがるが，さらに修正を加えたい方には文献 [1, 2] などが参考になるであろう．

参考文献

1) Lamport, L.: *LaTeX, A Document Preparation System*, Addison-Wesley Publishing Company (1986). 〔Cooke・倉沢 監訳，大野・小暮・藤浦 訳:「文書処理システム LaTeX」, アスキー出版局 (1990)〕

2) 岩熊 哲夫, 古川徹生: LaTeX のマクロやスタイル・ファイルの利用, Version 2.15, (1994). Available online: http://mechanics.civil.tohoku.ac.jp/~bear/soft/styleuse.pdf

(いしおか つねのり/大学入試センター)



石岡 恒憲

1985 年東京理科大学大学院修士課程工学研究科経営工学専攻修了．同年 株式会社リコー (ソフトウェア研究所) 入社．1998 年文部省 大学入試センター研究開発部助教授．組織改編に伴い現在 独立行政法人

大学入試センター准教授．統計学，信頼性工学，情報数理に関する研究に従事．工学博士．日本信頼性学会 (論文審査委員)，応用統計学会 (編集委員)，言語処理学会, ACL 各会員．Marquis Who's Who in the World, 2008/2009/2010/2011; in the Science and Engineering,2006-2007/2008-2009/2010-2011; in America 2009.